

[学会]

第85回 千葉医学会例会 第9回 千葉精神科集談会

日時：平成4年1月25日（土）

場所：千葉商工会議所14階第一ホール

1. 脳炎様症状を呈しながら葉酸補充で治癒した1症例

小石川比良来
(国立精神・神経センター
国府台病院)
越村 勲
(順天堂大学医学部付属
病院・神経内科)

精神分裂病の通院患者が昏迷様状態を呈し入院となった。入院後、瞳孔不同、腱反射の亢進、痙攣等の神経学的異常所見を呈しウイルス性脳炎が疑われたが、腰椎穿刺の結果は正常で抗ウイルス剤にも反応せず、症状は増悪し気管内挿管にまで至った。大球性高色素性貧血に着目し葉酸製剤の筋注を開始したところ、血中葉酸値の正常化と平行して症状が急激に改善した。いわば<葉酸欠乏性脳症>の存在を示唆する症例と思われる。

2. 躁うつ状態を呈した脊髄小脳変性症の1例

清水栄司, 児玉和宏, 小松尚也
(千大)
小島重幸 (同・神内)

進行する小脳性運動失調と周期性を有する躁うつ状態をあいっいで発症した症例を報告した。躁うつ状態に関しては炭酸リチウム、レボメプロマジンの併用投与を継続することで周期発現が抑えられた。進行する小脳性運動失調に関しては画像上著明な小脳半球萎縮を認めるが、若年発症で遺伝歴のないこと、発症数年後より炭酸リチウムなどの投与開始以後は小脳症状の進行が認められなくなったことから、分類不能の小脳萎縮症とされた。

3. 痴呆を伴う筋萎縮性側索硬化症の知能障害

——WAIS 所見を中心に——

松森基子 (帝京大・市原)
光畑由美子 (同・神経内科)

痴呆を伴う筋萎縮性側索硬化症の2症例に WAIS を各2回施行したところ、両症例の WAIS 所見は、その経時的変化も含めて非常によく似ており、病初期から判断力・論理的思考力・抽象能力が低下し、長期記憶・即時記銘力・計算力等は相対的に保たれる、前頭葉型痴呆の特徴が示された。また、痴呆は神経症状よりもゆっくりと進行すること、人格変化・強迫笑い・保続等の特異な症状の把握に WAIS が有用であることも示された。

4. アルコール依存症者の受診経過とその理由に関する検討

——専門病棟の経験より——

関 紳一, 根岸敬矩
(埼玉県立精神保健総合センター)

紹介性と予約制による当センター外来を受診し、専門病棟に入院となったアルコール依存症者132名について、紹介元機関、紹介理由、受診理由、受診経過、治療歴等を調査した。依存症者の受診経過を検討することで、早期治療をめざすための、当センターを含む関係者の役割について考察した。

5. アルコール依存症の治療プログラムの効果についての検討(その2)

浜屋達郎, 山内直人 (千大)

船橋北病院アルコール病棟が、1986年12月に新設されて以降3年間の、入院患者層の変化と治療プログラムが断酒継続におよぼす影響の変化を報告した。社会適応が比較的良好な入院患者が増加する中で治療プログラムの中で退院する者のうちでも断酒継続する者が、増加していることが示された。治療プログラムの各段階の効果の再検討の必要性があることが示唆された。